

ウサギ年を迎えて (まだ跳ねるか、跳ねないか)



札幌市医師会
札幌立花病院

くら まえ てつ
歳 前 徹

2023年（令和5年）は卯年という。自分も還暦を迎えた年から数えて二回目の卯年になるが、こんな年寄りの年男におめでさたもないもんだよとひがんだりする。

8年ほど前に脳神経クリニックを閉じて後、今もこれという病気もなく元気なので老人病院へ約30分かけて通勤している。高齢者更新で運転免許の返納の話もされるが、試験で満点を取り、返納などするものかと嘯いたりもする。

毎日患者さんの年齢を処方箋や検査依頼の伝票に年齢早見表をみて書き込む時、ふと眺めた自分の生まれ年が早見表の左端のはるか上のほうにあるのを見て愕然とすることがある。

年を取るにつれだんだん昔が懐かしく過去の出来事を思い返すことが多くなった。小樽で生まれ終戦の翌年の1946年小学校へ入学したが、本来通うべき学校の校舎が進駐軍に接収され遠い学校までの長い道を一年生から四年生の秋まで辛い思いで通わなければならなかった。やっと自分の本来の学校に戻れたと喜んだのも束の間、教育制度の改革で六三三制のため校舎が建設中だった中学生と同じ校舎で勉強することになり、体の大きなお兄さんたちに運動場も校庭も占領され兎のように小さくなって過ごした学校生活であった。

そんな時、朝鮮動乱が始まり、中共軍が済州島まで押し寄せてきたのをニュース映画で観て日本まで来たらどうしようと、満州から引き揚げてきた同級生と恐怖をもって語り合ったりしたのも昨日のように鮮烈に思い出される。兎の襟の綿入れを着た中共軍兵士が機関銃で殺されても殺されても次々にどこからか出てきて戦う人海作戦を見て、人の命の軽さを思った。

朝鮮動乱による特需で日本の復興が進み、小さな鉄工所だった父の工場もいっぺんに景気が良くなり、働く人々の表情も明るくなった。サンフランシスコ講和条約が締結され日の丸の旗を掲げることができるようになったが、衣料品は統制されパンツ一枚衣料切符がなければ売ってもらえず、そんなわけで軍服を着て下駄ばきの教師も多かった。しかし、どの先生も教育熱心で当直勤務の夜に手作りの望遠鏡で月のクレーターを見せてくれたり、休み時間も職員室に戻ることなく空の雲や周りの草花を生徒と観察したりしてくれた。

兎当番もあり、草を刈り集めたりもした。

一年の浪人生活の後、初めて小樽を離れ弘前大学

に入学した。（1959年）。銭湯に行くと「他県の人に笑われないよう湯船に入る前に身体を洗いましょう」などと書かれてあり、県民意識など持つはずもない自分は同じ青森県なのになぜ津軽と南部は別々でどうして言葉も違うのかとびっくりし、大学の教授は津軽弁で堂々と早口で喋りその上、周りには1,000年以上の歴史がある建物や寺々が並び、金木町出身の太宰治の作品に「地図」という短編があるが、自信満々だった琉球の王様が世界地図を見てがっかりしたのと同じく、100年の歴史しかない北海道といわゆる内地の人の北海道に対する見方に接し、日本人でないのかと不安になった。

そうこうするうち平民の正田美智子さんと皇太子のご成婚があったり、池田元首相の所得倍増計画、東海道新幹線の開通や東京オリンピックが開催され、金メダルを獲得するなど明るいニュースにいつの間にか地元になじんでいった。1970年に大阪万博が開催され岡本太郎の太陽の塔や三波春夫の歌声で明るく素晴らしい未来が見えたような気がした。

一方では70年安保と言われる安保闘争も過激になり、一般学生は政治離れし自分の生活の方に関心が絞られていった。

（1972年）アメリカの有人月探査機が月への第一歩を踏み出し宇宙飛行士とNASAの通信が雑音もなく同時通訳され夜遅くまでTVを観たのも昨日のようである。

（1989年）昭和天皇が崩御され年号も平成に変わり更に2019年5月には令和となった。その間、テロによりアメリカの世界貿易センタービルが破壊されたり東北福島の大津波で原発がメルトダウンしたり振り返るとあつという間の80年余であった。

医療事務も手書きのレセプトから電子媒体に変わり、内視鏡、CT、MRI、ロボット手術はもとより分子生物学の進歩は目覚ましい。

四人に一人が65歳以上となるという高齢化社会はネットで兎の耳は益々大きくなったが、戦争の脅威はつねにあり、兎のようにびくびく震えない平和な毎日が来ることを願う年の初めである。